水上バス岸壁のイソギンポたち

西なぎさの干潟から 200 メートルほど離れた水上バス乗り場近くの岸壁は，一部が石を組み合わせた斜面になっています。波がかかる場所は表面にびっしりとカキが付き，ここには干潟とはまた違った生き物たちが隠れています。葛西臨海公園ではこうした場所でしか見つからないのが，トサカギンポやイダテンギンポなどイソギンポの仲間です。

トサカギンポは体長 4 ～ 7 センチで，その名の通りトサカのような頭の突起が特徴。特殊な環境にいて釣りの対象にもならないためか，大きな図鑑にしか載っていません。10 月と 11 月に実施した調査では，イソギンポ類の大部分は内側が空になったカキ殻の中で見つかりました。このようにカキ殻はイソギンポ類にとって隠れ場所や休息場所となっているほか，初夏にはそこに卵も産みます。貝殻の内側というだけでも安全そうですが、オスが同じ殻の中で卵を守る習性もあるので，セキュリティは万全です。この時期，うっかり手を近づけると，血が出るほどオスにかみつかれることもあります。

トサカギンポ

今回の調査では、「隙間好き」というイソギンポ類の特徴を利用して、細いパイプを組み合わせたトラップを事前に沈めてみました。でも入っていたのはケフサイソガニばかり。どうやらイソギンポたちには、自然素材のほうがずっと魅力的なようです。

（調査係　井内岳志）

西なぎさ生き物観察ノート⑫　夜の西なぎさ

11 月 23 日、夜暗くなってから西なぎさへ生物調査に行ってきました（夜の西なぎさは立入禁止なので、特別な許可をいただいています）。わざわざ暗くて寒い夜に生物観察をするのは、この日が秋の大潮（1 年間で最も潮が引く日のひとつ）だったからです。秋の大潮は、春とは異なり夜中に大きく潮が引くので、普段とは違う生物を観察できるのではないか、という狙いがありました。

ここの東側突堤の先には、マガキやフジツボ類が島状になってできたカキ礁があります。ふだんは海水につかっていて渡れない沖のほうまで、大潮となる今回は歩いて行って観察することができました。時間が経つにつれ、だんだんと潮が引いていくと、複雑な形をしたカキ礁の大きなくぼみに海水が取り残されて、潮だまりができあがります。

そっと潮だまりの中を懐中電灯で照らしてみると、忙しく動き回っている小さなヤドカリやケフサイソガニ、ハゼやイソスジエビの仲間などの姿を観察することができました。この季節、海水の温度は気温より高いので、水中の生物のほうが活発です。また、小さな生物にとって複雑な形をしたカキ礁は、天敵に襲われる心配が少ない隠れ家で、暗い夜こそ絶好の活動の時間なのです。

カキ殻の間の
ケフサイソガニ

今回の調査では気温が低かったこともあり、観察した生物はそれほど多くはありませんでした。しかし、一見とても静かに見える西なぎさも、よく観ると様々な生物が活動しています。季節や時間によって生物の様子が違うことも、フィールド観察の面白さのひとつです。

（飼育展示係　中沢純一）

なぎさの小さなサカナ便り　番外編　魚の背中はマイホーム

今回の主役は、魚と深い関係のある小さな生き物です。まずは下の写真をご覧下さい。

これは、11 月下旬に西なぎさでつかまえたサッパという魚です。サッパは、東京湾ではおなじみの魚ですが、この日は、いつもと様子が違いました。頭のあたりに何か小さな「かたまり」が付いていたのです。よく観察すると、黒い眼のようなものが 2 つあり、生き物のようです。調べてみると、サッパの体液を吸う寄生虫、サッパヤドリムシだと分かりました。

このサッパヤドリムシ、サッパが激しく体を動かそうが、水槽をゆすられようが、サッパの頭から離れません。「一体、どうやってサッパにくっついているのだろう？」今度はそんな疑問がわいてきました。

そこで、サッパヤドリムシがサッパにくっついている部分を顕微鏡で観察してみました。すると、14 本ある足の先が全てフック状のかぎ爪になっていたのです。しかも、爪の前半は後ろの方に、後半は前の方にとがっています。サッパヤドリムシは、この爪をサッパの体に食い込ませてガッチリとしがみついていたのです。

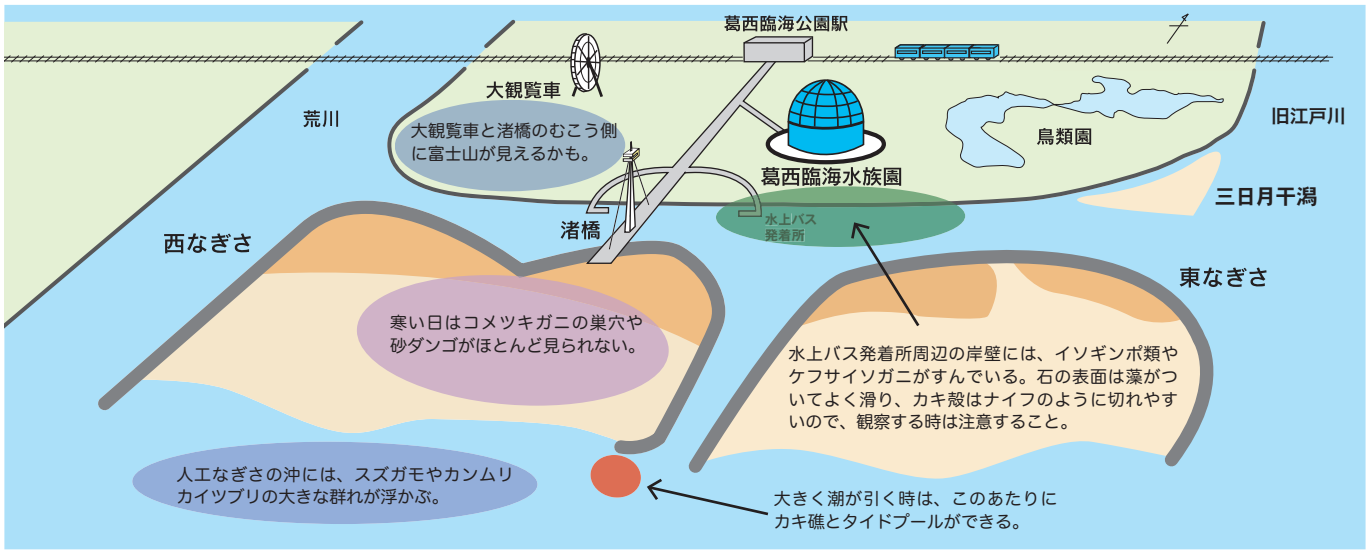
サッパヤドリムシにとって、サッパはマイホームであり食料でもあります。万が一、サッパから振り落とされたら命にかかわる一大事。サッパヤドリムシの持つ 14 本ものかぎ爪は、この危険を軽減するのに大いに役立つのでしょう。

生き物の姿かたちには、彼らの生き方が現れています。しかし、かたちだけを見ていても、その意味を知ることは困難です。今回、生き生きとしたサッパヤドリムシをすぐ目の前で観察できたことで、彼らの持つかぎ爪の意味が自然と分かりました。生き物が生きている姿は、ただそれだけで私たちに色々なことを教えてくれます。

「私の足、スゴイでしょ！」サッパヤドリムシが胸を張っているような気がしました。

（教育普及係　齊當史恵）

初冬の水族園周辺生き物マップ



●●●初冬の西なぎさ●●●

寒くなってくると、生物たちの様子も違ってきます。夏には干潟の砂浜の上にあんなにたくさんいたコメツキガニが、すっかり姿を見せなくなりました。岸壁の石組みの間にいるキタフナムシも、なんだか動きに素早さがありません。かわりににぎやかなのが、北の国から渡ってきた鳥たち。西なぎさの沖にはスズガモやカンムリカイツブリの群れが集まりだしました。真冬には数万羽の鳥たちが葛西沖で羽を休めます。

編集後記：空気が澄んでいる冬の朝夕、葛西臨海公園から富士山がくっきりと見えることがあります。夕焼け空に円錐形のシルエット、お磯のテーマパークで打ち上げられる花火より、実はこちらのほうがキレイかもしれません。

なぎさ通信 第 22 号（2007 年 12 月 5 日発行）　編集・発行 / 東京都葛西臨海水族園 /Tel : 03(3869)5152
（動物取扱業登録：第 002150 号　東京都葛西臨海水族園）